

TOEIC®スピーキングテスト/ライティングテスト

活用レポート 学校編

神戸大学

神戸大学では2007年10月より、TOEIC®テストで650点以上を取得した学生を対象に、英語のプレゼンテーション特修コースを開講しました。約半年間のコースが終了した2008年3月には、国内の大学でいち早くTOEIC®スピーキングテスト/ライティングテスト(以下TOEIC SWテスト)を導入し、プログラムの効果測定などに活用しています。本コース責任者の沖原勝昭教授と、本コースの企画・指導を担当されている神戸大学国際コミュニケーションセンターの石川慎一郎准教授に、TOEIC SWテスト導入の意図を中心にお話を伺いました。



沖原勝昭教授

PEP1	10月~2月上旬	プレゼンテーションの基礎を学ぶ通常授業
PEP2	2月中旬	国内合宿でビジネスプレゼンテーションの集中演習
PEP3	2月中旬~3月上旬	海外研修で学術プレゼンテーションの演習(2008年はメルボルン大学にて実施)。

*4名の講師(日本人教員2、ネイティブインストラクター、ビジネスインストラクター)によるチーム指導。

— 特修コースの概要を教えてください。

石川准教授:本コースはProfessional English Presentation、略称PEPという名称で、文部科学省が進める「現代GPプロジェクト」の「仕事で英語が使える日本人の育成」分野で採択していただきました。現代社会で真に必要なとされている英語のスキルを教育することがコースのねらいで、具体的にはそのスキルを、英語でのプレゼンテーション能力としています。

本コースを受講できるのは、一部の学部を除く神戸大学2年生全員で、TOEICスコア650点以上が受講申請の最低要件になります。実際には平均で730点以上の学生が集まりました。授業は2年次の10月から翌年3月までの約半年間で、カリキュラムは3段階に分かれています(右上の表を参照)。

PEP3までのプロセスを修了し、TOEICテストのスコアが800点以上でTOEIC SWテストのスコアが280点以上に達した学生は、プレゼンテーション最終試験を受けることができます。4年次までの間に最終試験を受け、合格した者にはPEP Certificateという資格を与える仕組みになっています。

— 1期目を終えての感触はいかがですか。

沖原教授:英語力で選抜された学生を集中的に訓練すると、これほどまでに効果が上がるものなのかと、大変驚きました。PEP2ではたった3日間の合宿で、学生たちの英語に対する学習意欲ががらりと変わりました。ある目的を持って集中的に学習することの重要性を、学生たちもすでに認識していますので、今後の大学の英語教育は、「英語の授業は週1時間」のようなやりかたではなく、集中訓練の要素を取り入れていく方途を探っていかなければならないという思いを大変強くしま



石川慎一郎准教授

した。また、プレゼンテーションをするという最終目標があれば、発表内容に関する情報を英語で入手することにも目的意識が生まれ、学生の研究能力・知的能力が育成されると同時に高度なリーディング能力なども強化されます。このようにプレゼンテーションが学習目標となることで、実用的な英語運用能力が強化されるとともに、学生自身の教養も高まるという効果が期待できます。

——出願と修了の両方の要件にTOEICテストのスコアが使われていますが、2008年3月には新たに、TOEIC SWテストも導入されていますね。

石川准教授:はい。導入のねらいの1つは、PEPというプログラムの効果を測定するためであり、もう1つは学生自身の実力診断の資料にしてもらうためです。本コースの最終試験の受験資格には、TOEICテスト800点以上であることに加え、TOEIC SWテスト280点以上を設定しています。3月にはコース履修者全員が受験し、スピーキングの平均点が141点、ライティングの平均点が153点という結果でした。学生たちの間でも、思ったより良い成績だったという声が多かったようです。

——効果測定のツールとしてTOEIC SWテストを選ばれた理由は何でしょうか。

石川准教授:テストを開発しているETSの信頼性の高さと、コースの受講・修了要件でTOEICテストを使用しているため、TOEIC SWテストは整合性のある評価指針だと考えられたことがまず挙げられます。また、受験が長時間におよぶテストに学生を拘束するのはなかなか難しく、テスト結果を実際の指導に生かすにはテストの結果が速く入手できることも必要です。短時間で高い精度で能力を測ってもらいたいというのが教育現場のニーズであり、そのニーズに応じてくれるものとして採用したのも理由の1つです。さらには、このテストの内容が「現代GPプロジェクト」の「仕事で英語が使える日本人の育成」を念頭に置いた本コースの方向性と合致していることも挙げられます。

現代社会のニーズに応えるレベルのプレゼンテーション力というのは、基本的な4技能の定着の上に築かれるべきものです。そこで、TOEICテストとTOEIC SWテストを組み合わせることで、プレゼンテーション力の素地としての英語力を総合的に評価しようと考えています。

TOEIC SWテストの問題内容について言えば、スピーキングテストでは音読のような基礎的な問題のほか、解決策を提案するような問題があり、ライティングにも意見を論理的に記述させる問題があるなど、プレゼンテーションにつながる力を見ることができる内容だと思います。

——今後は、TOEICテストとTOEIC SWテストをどのように活用されていきますか。

石川准教授:TOEICテストはPEPへの出願要件であるだけでなく、1年生の間に700点を取れば、2年次前期に設定されている2つの英語の必修授業をスキップして、選択制の上級授業を受講できる制度を設けており、すでに大勢の学生が利用しています。TOEIC SWテストの方は、現在のところPEPだけの利用になっていますが、学内で利用しやすい団体特別受験制度の活用も検討していきたいと考えています。

もっとも、テストはあくまでも英語力の診断の目安や動機付けの一つとして用いるべきもので、テストを目的とした英語学習を奨励しているわけではありません。テストを一つのきっかけとして、学生一人一人が自律的な姿勢で将来のニーズを見据えた英語の学びを深めてくれれば、と考えています。

<2008年4月取材>